

スポーツと祈り

～スポーツ選手はなぜ祈るのか～

浅井茅子（愛知教育大学）

はじめに

スポーツ選手であれば誰でも一度は“シュートが決まりますように”“優勝できますように”など、大切な場面で祈った経験があるのではなからうか。陸上競技で圧倒的な強さを見せたU.ボルトでさえ、スタート前には天を仰ぎ、祈りを捧げている。現在、スポーツ選手は科学的根拠を基にした極めて“合理的”なトレーニングに励んでいるにもかかわらず、なぜ未だに「非合理的」な「祈る」という行為をやめないのでしょうか。

そこで本研究では、「人間と祈り」「スポーツと祈り」の関係を歴史的観点から探ることで、スポーツ選手はなぜ祈るのか、そして今後スポーツと祈りはどうなっていくのかを考察した。

I. 人間と祈り

1) 祈りの概念

「祈り」の語源は、ラテン語の precare（願う、求める）であり、人間と人間を超えるものとの内面的対話のような行為を指す。神仏に助けを請うという意味に限らず、“心から望む”“切に希望する”とも定義される。人間は不完全であるが故に、自分の力では到達できない事柄に対する不安がある。心を穏やかに生きていくために祈りは極めて重要な行為であり、なくてはならないものなのである。

祈るという行為は人間特有の行為である。祈りが生まれた未開社会にこそ、祈りの本質や原点があると考えられる。科学の恩恵を受けない未開社会の日常は、無知ゆえに“不思議な現象”で溢れており、生活も安定しない。その“不安”や“恐れ”こそが「祈り」を生み出した。

2) 祈りの手段としてのスポーツ

時代によって様々な性格を伴って行われてきたスポーツの中に、“祈りの手段”としてのスポーツがある。生業にかかわる「儀礼スポーツ」として、ある身体活動（スポーツ）の動きが現実その現象を引き起こすと信じられて行われた。これは未開社会の「あやかり」の呪術の原理と共通している。その他にも、スポーツの持つ「優劣判別機能」によって望む結果を意図的に作り出したりもした。また、スポーツは神とのかかわりを深く持っていた。

II. 現代スポーツにおける祈り

今日、誰もが思い浮かべる“競争を前提とするス

ポーツ”の定義は「近代化」がもたらしたものである。結果や記録が最重視されるようになり、スポーツ選手は勝利への執着やプレッシャー、失敗への恐怖などと闘うことになった。それに加え、結果が予測できないというスポーツの「非合理」さが不安を助長する。今までスポーツ自体が「祈り」となり、“不安を取り除いていた”のにもかかわらず、反対にスポーツで“不安を感じる”ようになったのである。さらに、スポーツ選手は「人間」である。“不安だと祈る”という人間の本质がある限り、不安で満ちるスポーツの場面において祈りが必要とされるのは当然のことである。実際に、現在スポーツ選手はルーティン、お守りの所持、必勝祈願などの祈りを盛んに展開する。これらの祈りは一見、全く新しい祈りのかたちであるようにも思えるが、例えばルーティンのきっかけが「あやかり」であるというような点を考えると、古くから見られる祈りと本質はどれも同じなのである。

行き過ぎた競争主義の弊害を受け、誰もが気軽に楽しめる「ニュースポーツ」の概念が誕生した。これは、トップアスリートの力ともなる。選手がヨーガなどの「瞑想系スポーツ」でメンタルを整えて試合に臨む姿から近代スポーツに対抗して生まれたはずのニュースポーツが、結果的にアスリートのパフォーマンスを向上させることに繋がっている現状がある。

“健康になれるように”という願いを込めて運動をする人々の姿は、“雨が降りますように”という願いを込めて雨乞いのダンスをした未開人の姿と重なる。スポーツは再び「祈りの手段」へと戻ってきたともいえる。“ニュー”と言いながら、昔のスポーツの在り方にむしろ近づき、寄り添っているともいえるのではなからうか。

おわりに

“不安を祈りで解消してきた人間”が“不安だらけのスポーツ”を行う限り、スポーツ選手は祈り続けるのであろう。今後、スポーツが変化したとしても、そのスポーツはそれ自身にこの息苦しい社会に対抗する「祈り」の性格を内包したものに姿を変えたものとなるはずである。「スポーツ」も「祈り」も、非合理であるのにもかかわらず合理性を超える力を持ち、これからも深く結びつき合いながら人々の心の支えとなり続けるのではなからうか。